

2 目指せ、生産性ボトムアップ

候補豚の管理が産子数を変える

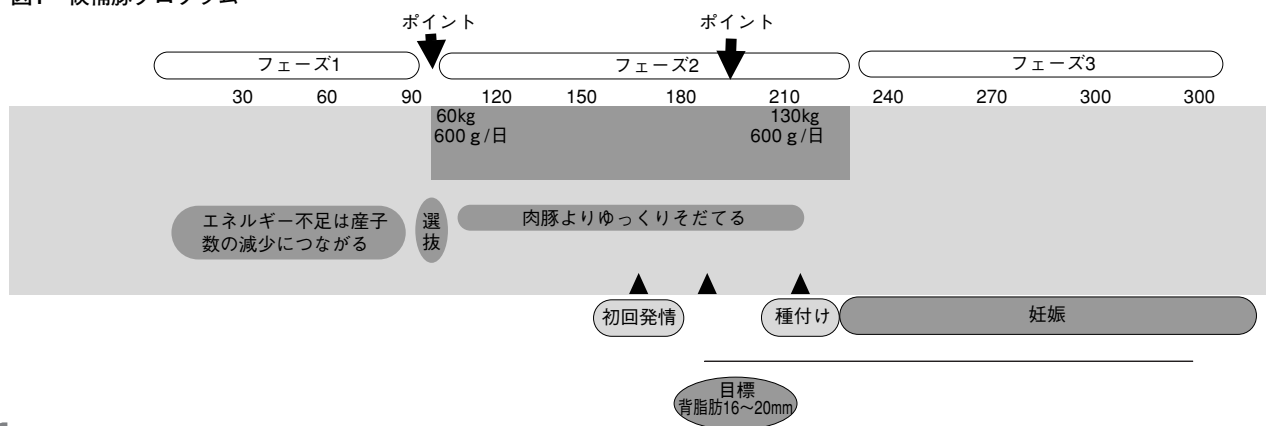
出荷頭数が少ない原因について、遺伝的な部分に目が向けられすぎているように感じます。それも間違いではないと思いますが、何かを悪者にして責任を転嫁しているようにも受け取れます。問題の原因ばかりに重点を置き、肝心の対応策が軽視されるのは避けたいものです。豚の遺伝子が同じでありながら管理する農場によって成績が全く異なるというのはよくあることです。もう1度、何が原因で産子数が少なくなるのか考える必要があると思います。

そのなかで、『候補豚の管理』についてあまりにも軽視されているところが多いように思います。一生働いてもらう重要な豚なのに、「自然に発情がきて産んでくれる」という風に簡単に考えてはいないでしょうか。

経営という部分では、一番重要であるはずなのに、力が入っていません。筆者自身も気になっていたので、少し整理してみました。皆さんも一緒に考えてみてください。

伊藤 貢 (有)あかばね動物クリニック)

図1 候補豚プログラム



1 育成期での重点ポイント

図1に、候補豚の育成プログラムの概略をまとめました。生まれてから妊娠が安定するまでの期間を3つに区切り、ステージごとにその目的を示しました。

ここでの最終目的は産子数のアップです。それには図2のチェックポイントが考えられます。

フェーズ1: 生後から60kgまで

60kgまでは十分な発育をさせる。この時期は、初回発情に大きく関係しています。フェーズ1とフェーズ2を比較したときに、初回発情により大きく関与するのはフェーズ1であり、十分な発育をさせる必要があります。栄養ではタンパ

図2 育成のチェックポイント

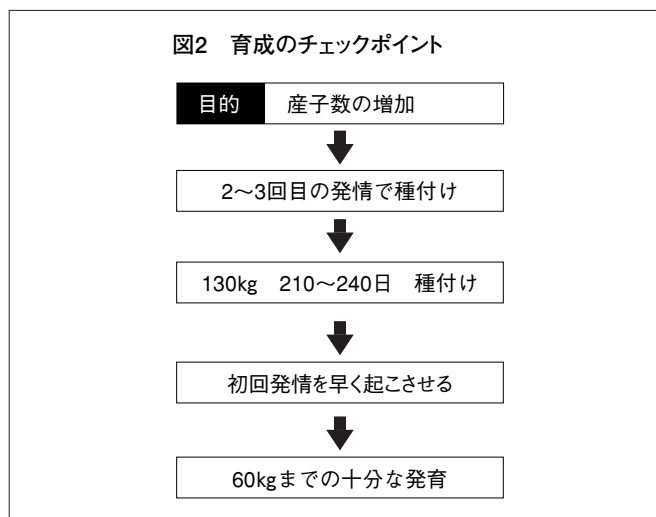


図3 フェーズ1期の養分要求量

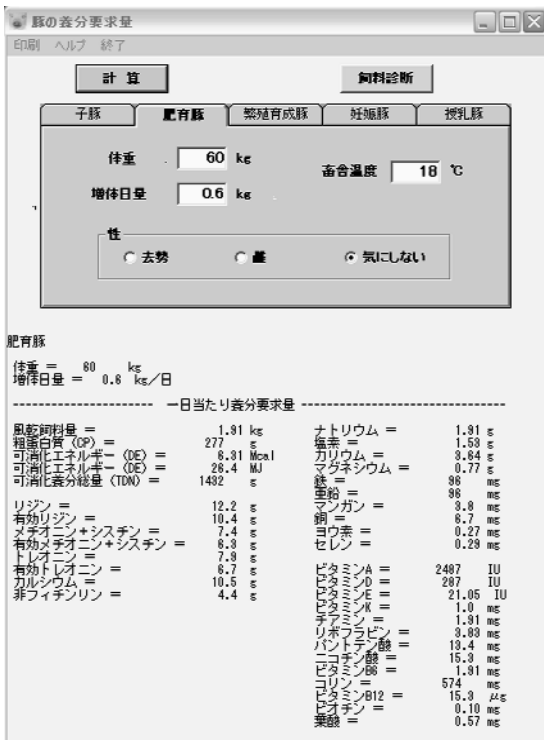


図4 フェーズ2期の養分要求量



ク質よりもエネルギーが重要になります。不断給餌で飽食に近い形で飼養してください。

図3の「2005年版の日本飼養標準・豚」に添付されていた飼料計算ソフトの結果を参考にしてください。1日当たりの可消化養分総量(TDN)1432 g、粗タンパク(CP)277 g、リジン12.2 g、を必要とします。一般的な飼料を例にとると、TDN76、CP16の飼料では、1日当たり1.8~1.9kgを摂取する必要があります。

フェーズ2:種付けまで

ゆっくり発育させる。この時期は初回発情・種付けと重要です。できるだけ早い時期に肉豚とは別飼養にして、急いで発育させないことが肝要です。初回種付けの目標は、日齢210~230日、体重130kg、背脂肪厚(P2)16~20mmとなります。必ず2~3回目の発情で種付けをしましょう。初回発情での種付けを避ける理由は、排卵数が少ないためです。

このとき、候補豚が痩せている場合は種付け前の約10日間、フラッシングと称して、飼料を一時的に500g~1kg多く与えます。それにより、インシュリンの分泌が促がされ、卵胞の発育が促進し、排卵数が多くなると考えられています。

図4の「日本飼料標準・豚」のフェーズ2期に該当する数値を同様に参考にしてください。TDN1988 g、CP356 g、リジン14.4 gを必要とします。この時期の飼料は、母豚用の妊娠期

か授乳期のものを与えていますが、農場によりバラバラです。一般的な基準だと、妊娠期の飼料を使う場合で2.7kg 授乳期の飼料の場合は2.5kgです。あくまでこれは目安であり、種付け時に体重とP2の測定を実施して、候補豚を常に同じ状態に維持できるように心掛けてください。

また、母豚の肥りすぎ・痩せすぎを感覚的に判断していると、人により基準が異なるということがあります。今回は詳しく触れませんが、器材によるP2測定は、客観的に母豚を評価するという点で、たいへん良い方法なのでぜひ実施していただきたいと思います。

フェーズ3:妊娠期

種付けをしたら、安定するまで豚の移動は極力避け、落ち着かせた状態にします。この時期でボディ・コンディションを調整します。ワクチネーションもこの時期に行ってください。

2 素豚導入の際の注意点

素豚導入時期を最近では早める傾向にあります。これは馴致の必要がある場合、できるだけ早い時期に導入先の農場の病相に馴らし、生まれてくる子豚に免疫を賦与する目的で行われています。導入元の都合もありますが、3~4ヶ月齢での導入を勧めます。

図5は、ある農場の導入後の初回種付け日数と生涯総生産頭数の関係を示したものです。この農場は、ハイブリット種で、6ヶ月齢で導入しています。多くの場合、導入してしばらくして初回発情が来ます。その後2～3回目の発情で種付けを行っています。図5で見ると、導入後80日以降での初回種付けが、生涯総生産頭数が多くなっていることが分かります。これは、発情3回目以降の種付けであることと、導入後

間もないころは、一次的に発育が停滞しますが、80日以降には発育が回復しているため、この時期以降に初回種付けをすることが生産頭数の増加に関係していると思われます。

3 連産性に優れた母豚とは

成績を上げるなかで、連産性は経済的な貢献度が大きな部分です。堀北らの報告した、淘汰された豚の分析を見ると興味深いので紹介します。

図6は、淘汰された豚の産歴を初産の分娩時の体重との関係で見たものです。若齢での淘汰は、体重が重い豚に多い傾向があります。

図7は、産歴と体重と淘汰の関係についてまとめたものです。図6では体重が重いほど、淘汰産歴が若齢化するとされていますが、初産のみで見た場合は、逆に体重が軽いほうが、淘汰される傾向にあります。

一般に、体重が軽いとエネルギー不足から卵巣の回復が遅れ、無発情になりやすくなります。とくに、3産までは自分自身の発育に使う分も影響し、エネルギー不足の傾向が強くなると考えます。

逆に体重が重い場合は、発情がきても受胎しにくい状態や泌乳量が減少する傾向になり、淘汰されやすくなります。

連産性の面から考えても、ボディ・コンディションのチェックは重要で、P2測定・体重測定は、生産頭数の増加と連産性を高めるためにもぜひ行ってください。

4 最後に

以下に列挙しました事項は、明治大学の額額先生がミネソタ大学時代に産子数をアップさせるための事項として、本誌にて紹介されたものです。参考にしてください。

- 導入後隔離・馴致・ワクチン接種は絶対に忘れない
- 150日齢から専用豚房で1日10分間、雄と接触させる
- 2または3回目の発情で交配する
- 交配時には210日齢、150kgを目標
- 初産豚には分娩舎での室温と換気に気を配り、快適環境を心がける
- 初産豚は介護分娩を心掛け、哺乳子豚には十分な初乳と保温を与える
- 初産豚には産後の飼料と水を最高量摂取できるようにする

図5 導入後初回種付け日数と生涯総生産頭数

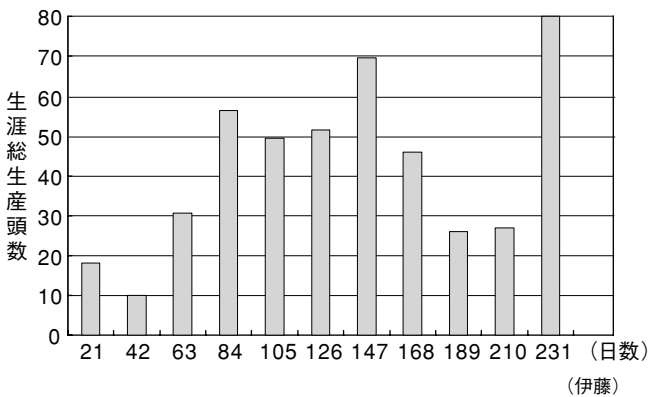


図6 淘汰産次別の体重変化

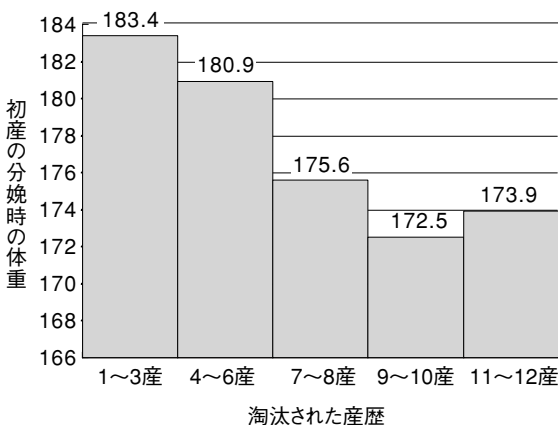


図7 体重と淘汰の関係

